

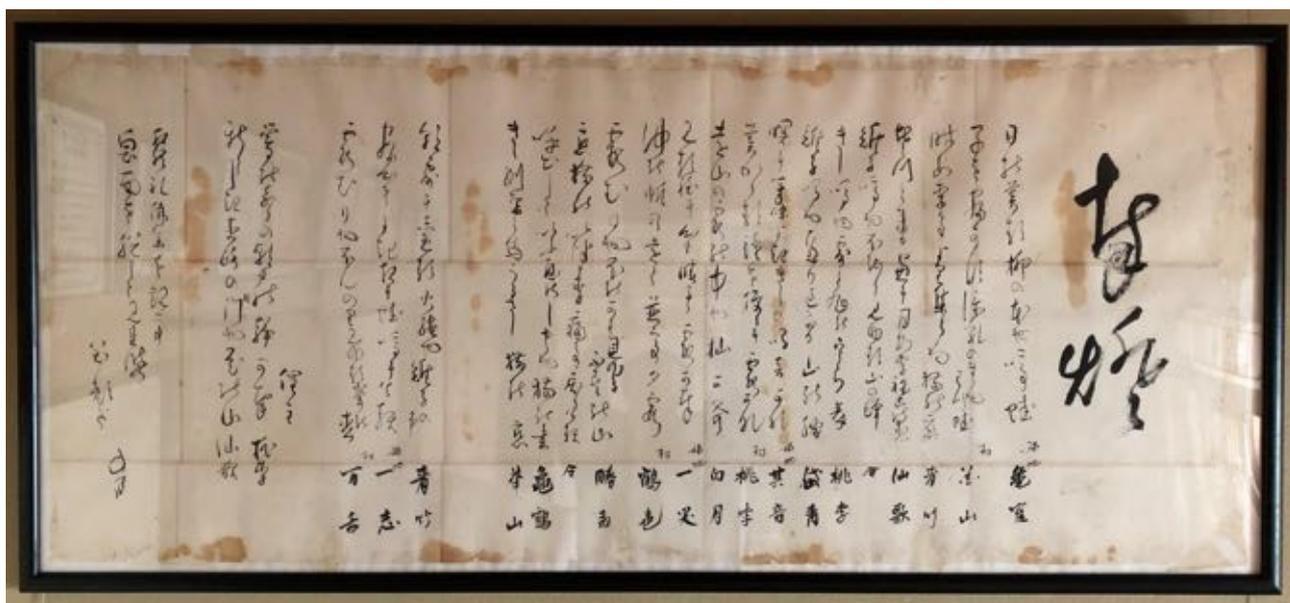
井月作品「奉燈句」について

令和2年 一ノ瀬武志

<概要>

貼り合わせた和紙に、俳句22句を取録した、井月作品です。「まくり」の状態で手に入れました。出所についての情報はありません。

経年によるシミが多く、紙のふちは触れるとポロポロとちぎれそうな状態でした。この貴重な井月作品を後世まで永く伝えるため、裏貼りして額装にしました。



<作品の目的は？>

本作品は「奉燈」と題されています。これは「奉燈句」または「献燈句」といって、寺社の祭礼のときに、箱型の木枠に貼り付けて境内につるし、夜は内側から火をともし、多くの人に見てもらったものと思われます。

紙のふちがポロポロなのは、木枠からはがした跡だからでしょう。実は、本作品を額装するとき、「ふちをきれいに切り落としますか、それとも残しますか」と尋ねられました。資料的な価値があるからと、残しておいて正解だったと思います。

奉燈句を広く一般公募することもあり、そういった行事を「奉燈句合わせ」と言います。具体的にどうするかというと・・・

- (1) 寺社の祭礼の日に向けて、俳句を公募する。おそらく投句料（入花料）を徴収したのであろう。
- (2) 集まった俳句を審査し、入選作品を大きな和紙に書いて、木枠に貼り付ける。
- (3) 祭礼の当日、境内につるして火をともし。つまりこれが審査結果発表である。
- (4) 祭礼が終われば、紙ははがされて捨てられてしまうので、入選作品とそのほか優秀作品を冊子にすることもあった。これを「奉燈句集」という。

本作品を見ますと、「催主」として桃李・仙歌の2人の名が書かれています。つまり、この2人が奉燈句合わせを主催した人物でしょう。そして、末尾には井月の句が書かれています。つまり、井月が審査員（選者）なのでしょう。

<季題について>

入選作品の季語を見ると、「蛙」「恋猫」「雉子」「霞」の4つであることがわかります。つまり、この4つを「季題」として、俳句を公募したのだと推測されます。春におこなわれた祭礼なのでしょう。なお、催主2人と井月の句は、この4つの季題にしばられずに詠まれたものなのでしょう。

<作者名の筆跡について>

催主の「桃李」「仙歌」、そして「井月」の名は、井月自身による真筆と思われます。それ以外の名前は、井月の筆跡ではなく、あとから書き入れたものと思われます。おそらく、まず井月が入選句をずっと書き終えたあと、催主の手で、入選者名を書き入れていったのだと推測できます。なお、催主2人の句も入選しています。

もしかしたら、選句の公平を期すため、井月には作者名を知らせずに審査してもらい、あとから作者名を書き入れた、ということなのかも知れません。

<「村」と「福地」について>

「村」は、奉燈句合わせが開催された村の、地元の人という意味でしょう。

「福地」は、伊那市富県にある地名です。そして、福地からの入選者が4名もいること、ほかの地名が出てこないことから推測すれば、本作品は「福地に隣接した村で開催された奉燈句合わせ」であろうと思われます。さて、どこでしょうか。

<作者たちの情報>

本作品に載っている人物たちの情報を、以下に挙げて行きます。参考にした文献は、「新編井月全集（井上井月顕彰会）」「井月編俳諧三部集（井上井月顕彰会）」「井上井月真筆集（井上井月顕彰会）」「長野県俳人名大辞典（矢羽勝幸氏）」、そして筆者が所蔵している「紅葉の摺もの（新編井月全集では「まし水」と呼んでいる）」です。

◇福地 亀鶴（亀雀）

「長野県俳人名大辞典」p.198 に、更埴市生萱の人。明治期。

「長野県俳人名大辞典」p.198 に、旧伊那郡の人。馬場凌冬門人。円熟社員。明治期。

「余波の水くき」No.386 に、下山夕とある。伊那市高遠町下山田。

「新編井月全集」p.381 日記篇に、南箕輪村神子柴、東朝軒亀鶴、高木氏とある。

◇村 花山

「紅葉の摺もの」No.46 にアヲシマとある。伊那市美篤青島。

「越後獅子」No.238 にイナとある。

「越後獅子」No.243 にイナとある。

「家づと集」No.150 に川下りとある。「川下郷」は旧高遠藩七ヶ郷の一つで、伊那市美篤から伊那町におよぶ広い地域を指す。(地元の人たちは伊那市中心部のことを現在でも伊那町と呼ぶ。)

「余波の水くき」No.257 にトミアカタとある。伊那市富県。連句にも名前が出ている。

「長野県俳人名大辞典」p.120～121 に、花山が16人も出ている。そのうち井月の時代に合致するのは・・・

- ・上伊那郡の人。幕末期。
- ・戸倉町若宮の人。幕末期。
- ・更埴市桜堂の人。幕末期。
- ・長野市上野の人。幕末期。
- ・飯山市蓮の人。明治期。
- ・下水内郡の人。明治。
- ・高森町の人。明治期。
- ・南安曇郡堀金村田多井の人。明治三十二年没。
- ・大町市下中町の人。明治期。
- ・須坂市の人か。明治。
- ・塩尻市本山の人。明治期。
- ・諏訪市文出の人。明治期。
- ・長野市大門町の人。明治三十年没。

◇村 青竹

「長野県俳人名大辞典」p.541 に、豊科町成相町の人。明治期。

「長野県俳人名大辞典」p.541 に、旧伊那郡の人か。馬場凌冬門人。円熟社員。明治旧派。

◇村 仙歌

情報なし。

◇村 桃李

「長野県俳人名大辞典」p.704 に、長野市松代町の人。幕末期。

「長野県俳人名大辞典」p.705 に、旧伊那郡の人。幕末期。

「越後獅子」No.68 に、北越とある。

「越後獅子」No.210 に、イナとある。

「家づと集」No.50 に、北越とある。

「家づと集」No.156 に、トノシマとある。伊那市東春近殿島。

「余波の水くき」No.442,443 にタハラとある。伊那市東春近田原。

「新編井月全集」p.376 日記篇の名簿らしきところに、桃李居士とある。

◇村 岱青

情報なし。

◇福地 其音

情報なし。

◇村 白月

情報なし。

◇福地 一笑

「紅葉の摺もの」No.107 にタシナとある。飯田市駄科。

「余波の水くき」No.194 にミスとある。伊那市美篤。連句にも名前がある。

「長野県俳人名大辞典」p.29～30 には、一笑が 16 人も出ている。そのうち井月の時代に合致するのは・・・

- ・ 東部町祢津の人。安政期。
- ・ 駒ヶ根市中沢の人。幕末期。
- ・ 飯田氏駄科の人。幕末期。
- ・ 長野市上野の人。幕末期。
- ・ 飯山市の人。明治初期。
- ・ 塩尻市平出の人。明治期。
- ・ 諏訪市湯の脇の人。明治期。
- ・ 下伊那郡高森町吉田の人。明治期。
- ・ 松本市東町の人。明治期。
- ・ 上田市柳沢の人。明治期。
- ・ 諏訪郡富士見町の人。明治期。
- ・ 伊那市福島の人。明治期。

◇村 鶴声

「長野県俳人名大辞典」p.157 に、鶴声が 6 人も出ている。そのうち井月の時代に合致するのは・・・

- ・ 箕輪町三日町の人。明治期。
- ・ 松本市神林の人。明治期。
- ・ 松本市島内平瀬の人。明治期。
- ・ 松本市島内山田の人。明治期。
- ・ 松本市埋橋の人。明治期。

◇村 勝寿

情報なし。

◇村 華山

情報なし。

◇福地 一志

「清水庵俳額」No.32 に、下手良とある。伊那市手良の下手良。

「長野県俳人名大辞典」p.27 に、一志が 8 人も出ている。そのうち井月の時代に合致するのは・・・

- ・戸倉町福井の人。幕末期。
- ・東筑摩郡四賀村会田の人。天保。
- ・飯田氏久堅の人。明治期。
- ・岡谷市の人。明治期。
- ・豊科町田沢の人。明治期。
- ・上伊那郡箕輪町沢の人。明治期。
- ・大町市八日町の人。明治期。

◇村 万舌

情報なし。

<「村」はどこなのか？>

自分なりに推理してみたいと思います。

- ・全 14 人中、7 名の情報がわからない。つまり半数が、どこの誰なのか見当もつかない状況である。逆に、情報がある人については、すべて複数の情報があって迷ってしまう。したがって、ずばりどこの村なのか特定できるような要素が乏しい。
- ・たとえば「俳諧集」や「奉納額」や「歳旦帖」といった作品は、基本的に井月の仲間や門人たちの句を集めて作られるものである。いっぽうで、本作品は“公募”によって作られたものであり、井月の仲間や門人ではない者が多く含まれているだろう。だから、どこの誰なのか、情報がわからない者が多いと推測される。
- ・井月には、伊那谷の各地に「活動拠点」ともいえる有力な支援者たちがいた。そういった人たちの名前が載っていれば、どこで作られた作品なのか、特定するための情報となるであろう。
- ・催主のひとりである「桃李」の名は、井月の日記の中にある名簿に載っている。この名簿は、俳諧集制作のために作った“俳人リスト”と思われる。桃李には「居士」と付いており、すでに故人だったのだろう。かつて井月がお世話になった人として、リストに名が挙がっているのではないだろうか。つまり桃李は、有力な支援者であった可能性が高い。北越ではないとすれば、伊那市東春近の殿島か田原ということになる。
- ・いっぽうで、もうひとりの催主である「仙歌」については、まったく情報が見つからなかった。村の有力者か、あるいは桃李の縁者か。なお興味深いのは、仙歌の最後の句に手直しが入っている点である。井月が書きながら、「門」を「数」に直したほうがいいですね、などと言ったのだろうか。

催主の桃李が伊那市東春近（当時は東春近村）の人だとすれば、隣の村は伊那市富県（当時は富県村）の「福地」であり、地理的に整合性がとれると言えるでしょう。東春近村のうち、殿島の人なのか田原の人なのか、未解決の問題が残りますが、およそ次のような“ストーリー”が推測されます。

(1) 東春近村で、祭礼の日が近づいたので、奉燈句合わせを催すことにした。おそらく、次のような内容のチラシを作って配ったのだろう。

「今度の祭礼に向けて奉燈句合わせを行います。季題は○○。締め切りは○月○日。投句料は○錢。選者は井月先生。投句をお待ちしています。催主 桃李・仙歌」

(2) 村の内外から、俳句の応募があった。井月による審査の結果、東春近村から 15 作品、となりの富県村から 4 作品が入選と決まった。

(3) 入選作品 19 句+催主 2 句+選者 1 句=合計 22 句を、大きな和紙に書いて木枠に貼り、祭礼の日に境内につるして発表した。

(4) そして井月は、集まった投句料の中から、いくらかの礼金を受けとった。

<井月の句について>

本作品の末尾に書かれている井月句は、「新編井月全集」に載っていない“新発見句”です。

籠礼仏参を観て

鬼面を脱して見れば笑顔哉 井月

まず、詞書（ことばがき）の「籠礼仏参」とは何でしょう。お寺にこもって仏を供養する、といった意味でしょうか。あるいは、冬ごもりを無事に終えることができたお礼に寺へお参りする、といった意味でしょうか。解釈に戸惑いますが、「観て」ということは、そういった行事を井月が見た、という意味に受け取れます。

この句には季語がありませんが、入選者たちの句は、「蛙」「恋猫」「雉子」「霞」といった春の季題ですので、この句も何か春の行事を詠んだものだろうと思われまます。

「鬼面を脱して」は、どういう状況でしょう。能か、奉納の舞いか。演技を終えておそろしい面を外してみたら、役者の笑顔が現れた、といった様子かも知れません。あるいは、節分の豆まきで鬼の役の人がお面をかぶっていた様子でしょうか。豆まきが終わり、鬼面を外して笑顔で立春を迎える様子を詠んだのかも知れません。

それとも、「鬼面」を「おにづら」と読んで、普段は怖い顔をしている人が、お寺参りのときは笑顔でいるよ、といった様子でしょうか。

どなたか、わかる方がいらっしゃったらご教授ください。